

長崎県感染症発生動向調査速報

平成25年第1週 平成24年12月31日（月）～平成25年1月6日（日）

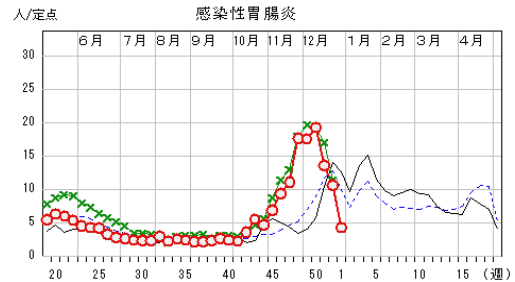
☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

(1) 感染性胃腸炎

第01週の報告数は189人で、前週より277人少なく、定点当たりの報告数は4.30であった。

年齢別では、20歳以上（41人）、10～14歳（28人）、1歳（24人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県南保健所（6.80）、県北保健所（6.33）、西彼保健所（5.50）が多かった。

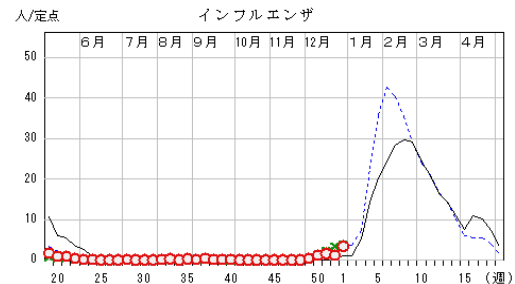


(2) インフルエンザ

第01週の報告数は239人で、前週より160人多く、定点当たりの報告数は3.41であった。

年齢別では、20～29歳（48人）、30～39歳（32人）、40～49歳（26人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県南保健所（9.13）、壱岐保健所（7.67）、県北保健所（5.50）が多かった。

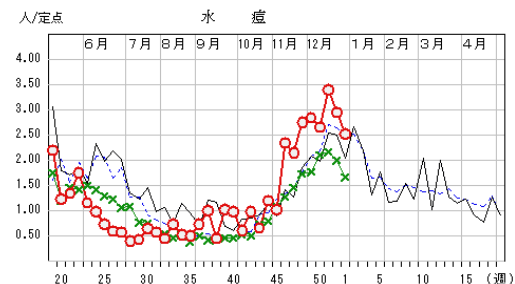


(3) 水痘

第01週の報告数は111人で、前週より19人少なく、定点当たりの報告数は2.52であった。

年齢別では、1歳（26人）、3歳（22人）、2歳（21人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県北保健所（6.00）、県南保健所（5.80）、佐世保市保健所（4.50）が多かった。



○—○ 当年(長崎県) — 前年(長崎県)
×—× 当年(全国) - - - 前年(全国)

☆季節情報

【感染性胃腸炎】

長崎県における第1週の報告数は189人で、前週より277人減少して、3週続けての減少となりました。また、第1週の定点当たりの人数（4.30）、全国定点当たりの人数（4.36）を若干下回りましたが、壱岐地区を除く県下全域より報告がありました。前週と同じ値の対馬地区を除く全地域で前週より減少し、終息基準値の「12」以上のレベルの地区はありませんでしたが、例年冬場は報告数が増加傾向にありますので、今後の動向に注視していく必要があります。

例年10月から11月にかけて流行の立ち上がりが見られ、12月中旬頃がピークとなる傾向にあることから11月13日には、厚生労働省より、「感染性胃腸炎の流行に伴うノロウイルスの予防啓発について」の通知が出されたところですが、本疾患による患者数の全国的な増加が、同時期では過去10年で平成18年に次ぐ高い水準であることから、11月27日に同省から「感染性胃腸炎の流行状況を踏まえたノロウイルスの一層の予防啓発について」の通知が出されました。全国的にも減少傾向にあるようですが、まだまだ十分な注意が必要です。

感染性胃腸炎は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くは1～2歳の乳幼児が占めています。原因はロタウイルス、ノロウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。

原因微生物のうち、ロタウイルスについては2011年7月にワクチンが製造承認され、2012年7月には国内2製品目が発売されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に、小さいお子さんがいらっしゃるご家庭では、保護者の方が手洗いの励行、体調管理や体調の変化に心掛けてあげるなどして感染防止に努め、早目に医療機関を受診させてあげるよう心がけましょう。

【インフルエンザ】

長崎県における第1週の報告数は前週より160人増加して239人でした。定点当たりの人数も一気に上昇して、前週の1.13から3.41になり、県下全域から報告が上がっています。例年、地方におけるインフルエンザの流行は年末年始の帰省客によって都市部より持込まれたウイルスに端を発して、本格的な流行が始まり、1月下旬～2月上旬に流

行のピークを迎えます。本県においても報告数が増加し、県南地区（9.13）においては、注意レベル「10」に近い値です。年齢別にみると、20～40代の成人に多く、まだ学校での流行がみられていないので、今後の動向に注視し、感染予防に心掛けましょう。

インフルエンザには抗インフルエンザ薬がありますが、予防にはワクチン接種が有効な手段の一つです。今週は寒気の影響で、寒い日が続いています。小さいお子さんや高齢者はもとより、受験生の方も体調管理に十分に気をつけましょう。また、外出からの帰宅時にはうがい、手洗いの励行、マスクなどによる「咳エチケット」で積極的な感染防止に努めましょう。

【水痘】

長崎県における第1週の報告数は、前週より19人減少して111人でした。定点当たりの人数は2.52で、全国定点当たりの人数（1.67）を上回っています。上五島地区を除く県下全域から報告があり、中でも県北地区（6.00）、県南地区（5.80）、佐世保地区（4.50）では注意報レベルの「4」以上となっています。

この疾病は、例年、冬場に患者数が増加する傾向にありますので、今後の動向に注視していく必要があります。

水痘は水疱瘡（みずぼうそう）とも呼ばれ、原因となる水痘帯状疱疹ウイルスは伝播力が強く、ウイルスを含む飛沫あるいは飛沫核を経気道的に吸入することによる飛沫感染あるいは水泡の内溶液と触れることによる接触感染により感染が成立します。手洗いの励行、体調管理に心がけ感染防止に努めましょう。

☆トピックス：感染性胃腸炎（ノロウイルス）に気をつけましょう。

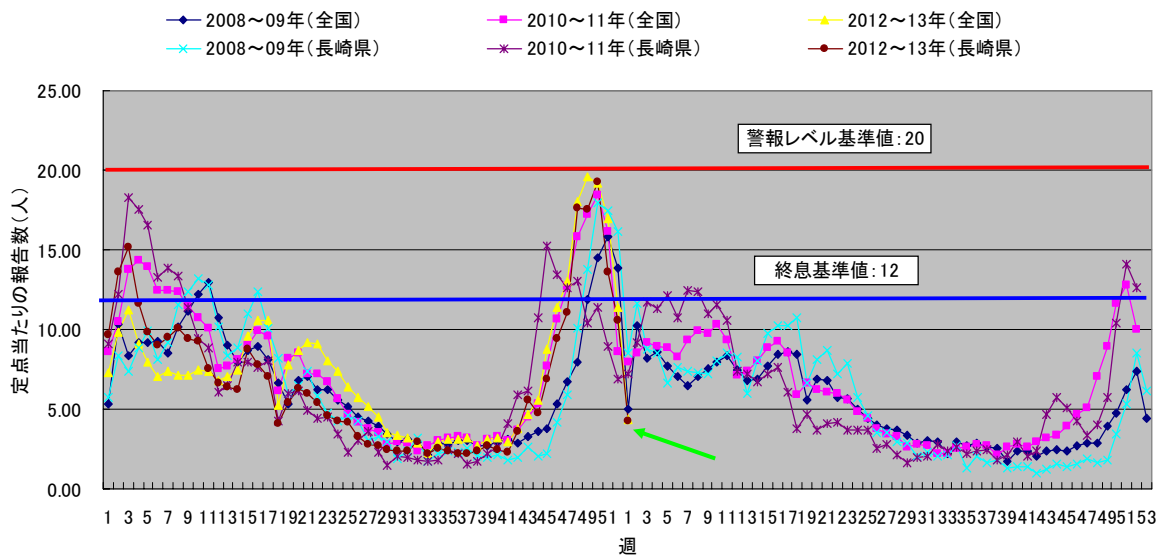
昨年から、特にノロウイルスによる感染性胃腸炎の流行が懸念されており、各地で本ウイルスによる大規模な食中毒や福祉施設等での感染症関連のニュースが取り上げられています。

本県においては、感染性胃腸炎の報告数は3週続けて減少が認められていますが、引き続き感染防止対策に努めましょう。2009年の新型インフルエンザ流行の際、手洗いの積極的な励行やマスクの着用等の公衆衛生意識の向上に伴って、感染性胃腸炎の流行も極端に抑制されたことから、手洗いの励行は、簡便かつ有効な手段であると考えられます。

新年を迎え、仕事始、始業式等の年始行事の増加や、受験シーズンに突入する時期でもありますので、積極的な感染防止に努めましょう。

ノロウイルスの潜伏期間は1～2日で症状の持続期間は数時間～数日です。症状は他の胃腸炎ウイルスと同様に嘔気、嘔吐、下痢が主で、腹痛や発熱を認める場合もあります。乳幼児から成人に至るあらゆる年齢に感染します。

万が一発症した場合は、速やかに医療機関を受診しましょう。



感染性胃腸炎における2008年から13年第1週までの推移

☆トピックス：インフルエンザの動向に注意しましょう。

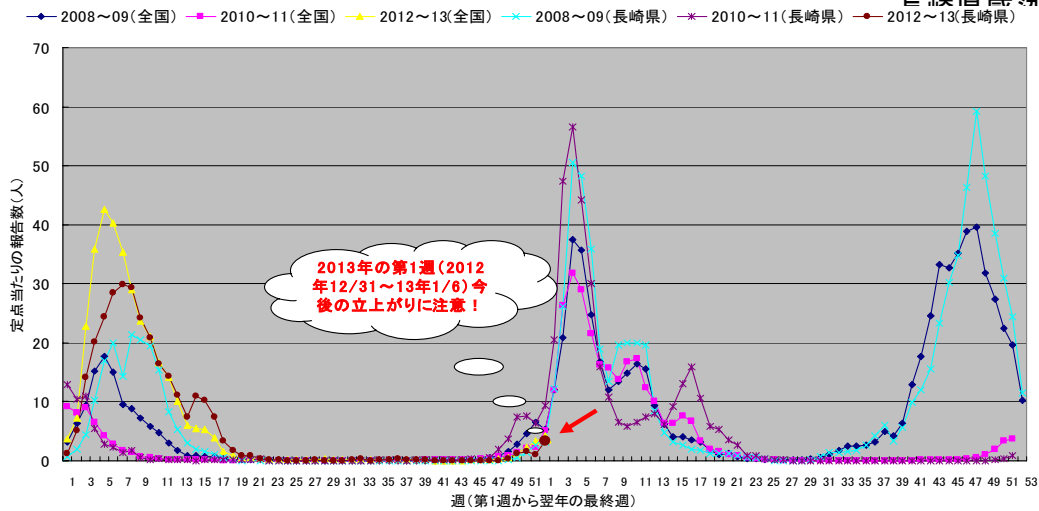
新年を迎え、寒さが一段と厳しくなっています。

例年、本県でのインフルエンザの流行は冬休みをはさんで翌年の第1週から患者数の増加が認められていますが、本年は、12月4日に2012/13シーズンにおいて、県北地区の小学校1校で、最初のインフルエンザ（疑い）の発生に係る臨時休業措置がとられました。

本県の第1週の定点当たりの報告数は3.41でした。県南地区では、9.13と高値を示しています。また、県下全域から報告があがっており、今後の感染拡大が懸念されます。50週（12月10日～16日）のインフルエンザ定点における患者報告数が、流行開始の目安としている「1.0人」を上回ったことから、インフルエンザの流行入りが発表されています。

また、当研究センターに搬入された患者の検体について検査を実施したところ、すべてA/H3、いわゆるA香港型インフルエンザウイルスの遺伝子が検出されています。

年末、年始の帰省や旅行など、大規模な人の移動が終わり、地方ではこれから本格的な流行シーズンに突入します。長崎県もこれまで同様の傾向を示していますので、今後の動向に注意が必要です。ワクチン接種による予防はもとより、手洗いの励行、外出先から帰宅した際のうがい、人ごみに入る際はマスクの着用などで、積極的な感染防止に努めましょう。



インフルエンザの定当当たりの報告数の推移(2008年~2013年第1週まで)

インフルエンザ・長崎県(2013年第1週)

	今週		1週前		2週前		3週前		4週前		5週前	
	定当	状況	定当	状況	定当	状況	定当	状況	定当	状況	定当	状況
佐世保市	1.64	-	0.73	-	0.73	-	-	-	0.27	-	-	-
長崎市	2.65	-	0.94	-	1.82	-	0.71	-	0.24	-	-	-
壱岐	7.67	-	0.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-
西彼	1.5	-	0.83	-	-	-	-	-	-	-	-	-
県央	1.9	-	0.2	-	0.3	-	0.2	-	-	-	-	-
県南	9.13	-	1.63	-	0.13	-	-	-	-	-	-	-
県北	5.5	-	8	-	17.5	△	17.5	△	5.5	-	1	-
五島	2.4	-	0.2	-	-	-	-	-	-	-	0.2	-
上五島	3	-	0.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-
対馬	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
長崎県	3.41	-	1.13	-	1.61	-	1.2	-	0.41	-	0.07	-

警報・注意報レベルの基準値(定当当たり報告数)

- : 警報レベル
- △: 注意報レベル
- : 警報・注意報なし

警報レベル		注意報レベル
開始基準値	終息基準値	基準値
30	10	10

☆トピックス：風疹に気をつけましょう。

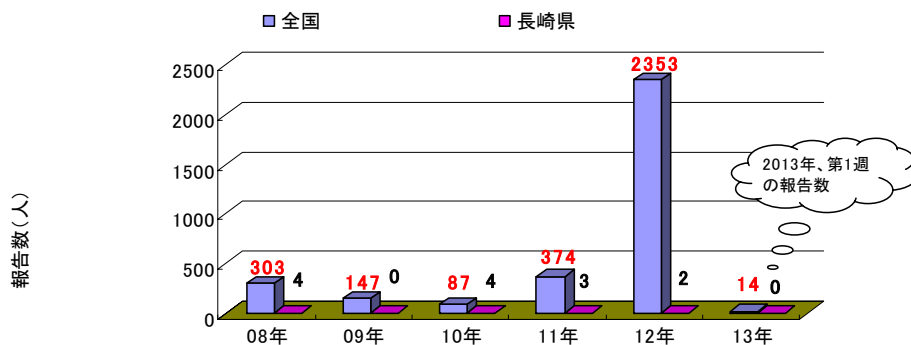
昨年は、風疹（三日はしか）の報告数が首都圏を中心に過去5年間に於いて最も急激に増加しました。その内訳は20～40歳代の男性が全体の約6割を占めており、風疹ワクチンの接種対象が1994年まで中学生の女子に限られたため、この年齢層には免疫がない男性が多数存在していることが今回の流行に大きく影響しているようです。

2012年第1週から52週までの間、本県では第35週に1件、第41週に1件（30代前半の帰省者）、計2件の発生報告がありました。2013年第1週の時点では本県での報告はありませんが、全国報告数では14人でした。

風疹はせきやくしゃみなどから感染し、通常は発疹や発熱が起こりますが軽微な症状で経過し、重篤化することはほとんどありませんが、妊娠初期3ヶ月までに感染すると、胎盤を経て胎児にも感染し、先天性の心疾患や難聴、白内障など（先天性風疹症候群：CRS）を引き起こす危険性がある恐ろしい感染症でもあります。

風疹やCRSは予防接種により予防可能ですが、妊婦へのワクチン接種は禁忌であるため、妊婦にうつすことのないよう、配偶者や周囲の人は医師と十分相談の上、抗体検査やワクチンの接種を実施することが重要です。

本県での報告数は少ないですが、今後の風疹の動向に注視して十分に注意しましょう。



報告年(2008~2013年第1週まで)

全国と長崎県の風疹の報告数の推移

